



書評

川成 洋  
(プロフィール p.43)



■明石書店  
■2017年3月刊  
■定価 3,800円+税

評伝キャパ——

その生涯と『崩れ落ちる兵士』の真実

吉岡栄二郎 著

全く偶然の瞬間を撮った1枚の写真によって、架空の人物が実在の世界的な競争報道カメラマンに生まれ変わったなどと言えば、これはまさに現代のシンデレラであろう。その人物とは、アメリカの著名な国際カメラマン、ロバート・キャパである。

1936年、パリ。祖国でナチスの毒牙から逃れた写真家志望の22歳ユダヤ系ハンガリー人アンドレ・フリーマン(フランスに亡命してから、フランス人のように「アンドレ」と改名)と2歳年上のユダヤ系ドイツ人のゲルダ・タロー(当時パリに留学していた若き日の岡本太郎から「タロー」という名を拝借していた)の2人は、赤貧洗うがごとき生活から脱出しようとしていた。アンドレが撮った写真をキャパなる人物が写したとして、タローの雑誌社や新聞社への売り込みも成功し、さらに毎日新聞パリ支社の城戸又一の下で現像のアルバイトもでき、何とか生活の目処が立っていた。

やがて7月17日、スペイン全土で正規

軍クーデターの勃発。叛乱軍に対する市井の国民の武力抵抗、そして内戦。ナチス・ドイツとイタリアが叛乱軍側の戦列で戦う。2人は躊躇わず内戦の取材に赴く。もちろん共和国陣営の取材である。9月3日、コルドバ戦線のセロ・デル・タコの丘でアンドレが撮った写真《崩れ落ちる兵士》によって、アンドレがロバート・キャパへと華麗な変身を遂げる。

しかし、この《崩れ落ちる兵士》をめぐる、こうしたことはよくあるようだが、キャパの存命中から現在まで、どこで、誰が、どのようにして、この写真を撮ったのかという憶説が飛び交っていた。たとえば、同行したタロー撮影説、兵士の完全なるやらせ説など。

このテーマを20年以上も研究してきた本書によると、まず今までの諸説を全面的に否定し、これは現在で言うところのモデルを使った「やらせ写真」であると断じている。曰く、タローが兵士に指示して走らせていた。キャパは斜面から

片膝についてカメラを構えていた。「キャパのすぐ後ろの距離から“パァーン”という乾いた1発の銃声が聞こえてきた。キャパは銃声に背中を叩かれたように衝撃を受け思わずシャッターを押した。(中略)撃ったのは敵ではなかった。味方の兵士の誤った発砲だった」

これではキャパもタローも終生沈黙せざるをえなかったろう。この説明の方が、私もようやく納得する。

ところで、本書プロローグの最後のセンテンス——「私たちは、伝説となったひとりの男・ロバート・キャパに一度遭いたいと思う。喜びと哀しみの頂点を見てきた男から、人間というものの本当の話を向かい合って静かに聞きたい——、そんな気持ちからこの一書は生まれた」——を読んで、なぜか、この労作はもしかしたら遺書かもしれない、と私は思った。果せるかな、昨年7月中旬、著者の吉岡栄二郎さんは亡くなった。謹んでご冥福をお祈りしたい。

KanKanTrip17

聖地サンティアゴへ、星の巡礼路を歩く

戸谷美津子 著

書籍紹介



■書肆侃侃房  
■2017年6月刊  
■定価 1,600円+税



戸谷 美津子  
MITSUKO  
TOTANI  
1953年東京生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒業。編集プロダクションを経てフリーライターになる。旅、アウトドア、インタビューなどを中心に活動。趣味の山歩きでは国内はじめアジアの山、スイスアルプス、ヒマラヤなどに登る。時代小説のファンで眠る前の読書タイムが至福の時。合気道4段。

acueductoの読者ならきつと、「ブエン・カミーノ」の意味をご存じでしょう。カミーノは「道」、ここではキリスト教の三大聖地のひとつ、サンティアゴ・デ・コンポステーラへ続く巡礼路を指しています。そこを歩く人々が交わす挨拶が「ブエン・カミーノ」、すなわち「良い旅を」です。

2年前の春、フランスの西の端からサンティアゴまで、約800km40日間の徒歩の旅をしました。スペインの大地をただひたすら歩くだけのシンプルな旅がしたい。それが旅の動機です。一方、巡礼路を、キリスト教徒でもない私が一体どういう「心持ち」で歩けばいいのだろうか？という思いを心の片隅に抱きました。が、それも旅の最初の頃、巡礼宿で聞いた言葉で払拭できました。曰く、「心を開いて旅をすれば、たくさんの方が入ってくる」「巡礼路でいちばん大切なのは、世界中から来た人と話をする事」。

野の花が咲き乱れる巡礼路には、多くの旅人が歩いていました。歩く理由も年

齢も、1日に歩く距離も旅のスタイルも人それぞれ。高齢の一人旅、親子、カップル、元気にカッ飛ばしている人、足を痛めてゆっくり歩く人など……赤ちゃん連れの女性もいれば、「カミーノ・ラブ」と呼ばれるカップルが生まれたりもします。

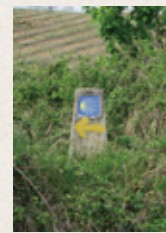
私たちの旅は早朝宿を出発し、1日20km前後を歩きます。宿に着いたらシャワーに洗濯。その後は町をぶらつきながらバルで喉をうるおしたり、レストランで「巡礼定食」を食べたり。時には宿で自炊をすることもありました。そして、夜9時にはベッドに入ります。

この本はそんな旅の日々を、そこを歩く様々な人たちとの出会いと別れ、再会に焦点を当てて書いています。毎日歩くだけの単純な日々。それが一生忘れられない感動の日々になったのは、スペインの春の景色の美しさはもちろん、そこで出会った人々との心温まる交流があったからです。

食事や巡礼宿の料金、持ち物や歩く際のアドバイスなど、旅立つ時に役立つ情報

読者プレゼント

抽選で1名様に、本書をプレゼント!  
ハガキまたはe-mailの件名に本書タイトルを明記の上、郵便番号、住所、氏名、電話番号、『acueducto』の感想を書いてご応募ください。  
応募先:有限会社 ADELANTE  
応募締切:2018年2月28日(水)消印有効 【宛先はp.3】



左)目的地までは黄色い矢印とホタテ貝が導いてくれる  
右)世界各国の巡礼者たちとタベのひととき  
下)春の巡礼路は菜の花が満開



も掲載しています。ちなみに一緒に歩いた夫は「次はぜひバルで地元の人たちと話したい」と、帰国後スペイン語の勉強を始め、半年後に単独スペイン旅行、1年後にはバレンシア短期留学の夢を果たしました。

さあ! あなたもぜひ、中世から続くこの巡礼路を歩いてみませんか? 季節は春が最高です! 「ブエン・カミーノ!」、どうぞ良い旅を!